

海外派遣サッカー指導者におけるコーチング効果の実態調査
—ブータンサッカー代表選手の競技力向上に関する考察—

松山 博明 上田 滋夢 上林 功

Effects of expatriate soccer coaching
—Improvements in the performance of the Bhutanese national team—

Hiroaki MATSUYAMA Jim UEDA Isao UEBAYASHI

海外派遣サッカー指導者におけるコーチング効果の実態調査 — ブータンサッカー代表選手の競技力向上に関する考察 —

松山 博明 上田 滋夢 上林 功

Effects of expatriate soccer coaching
—Improvements in the performance of the Bhutanese national team—

Hiroaki MATSUYAMA Jim UEDA Isao UEBAYASHI

要 約

本研究では、選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果を検証するために、約10年間4名の指導者が関わったブータンサッカー代表選手の競技力向上に関する考察を行うことを目的とした。その結果、以下の内容が明らかになった。海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の分析結果から、育成群がシニア群に比べて、技術面、戦術面、心理面の値が有意に高値を示した。海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析結果から、技術面で育成群がシニア群に比べて、「ボールコントロール中イメージをもってプレーが出来るようになった」、「様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。また、戦術面で育成群がシニア群に比べて、「素早く適切なポジショニングを取ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。以上のことから、海外派遣サッカー指導者は、短期的な期間ではなく長期的・中期的なビジョンの中で、継続的に育成年代から指導する必要がある。また、派遣された指導者は、育成年代から国際経験などを多く積み上げる必要があると考えられる。

キーワード：海外派遣サッカー指導, コーチング効果, ブータンサッカー, 代表選手

1. はじめに

公益財団法人 日本サッカー協会（以下、JFA：Japan Football Association）は、1996年より、世界をスタンダードとした強化策を推進するポリシーを明確に揚げ、育成強化に取り組み、1998年のフランスワールドカップから4大会連続でワールドカップ出場を実現した（清水，2013）。また、女子においても2000年から本格的な女子の普及と強化として、「女子プロジェクト」が発足し、国際サッカー連盟（以下、FIFA：Fédération. Internationale de Football Association）女子ワールドカップには全6大会に出場し、オリンピックには5大会中4回に出場した。2011年のFIFA女子ワールドカップではアジア勢の代表チームとして初優勝を飾った（黒澤，2004）。これまでの活躍から鑑みても、現在ではJFAがアジアサッカーを牽引する存在になった。そこで、JFAはアジアサッカーの発展とサッカーを通じた国際貢献に寄与したいと考え、アジア貢献事業を行うようになった。このアジア貢献事業は、アジア諸国に代表（ユース年代代表チームを含む）監督やユース育成指導者を派遣し、指導を行う知的支援などがある。JFAは1999年12月、最初にマカオ協会からの海外派遣サッカー指導者の要請を受け、代表およびユースチームの監督として上田栄治氏（現JFA理事）をマカオに派遣した。それ以降、多くの指導者がアジアの様々な国や地域で代表監督や育成コーチ、審判インストラクターなどを務め、チームや選手、審判員の育成・強化に尽力している（JFA, online）。その中でも、アジア諸国から育成年代を指導する日本の指導者の需要は、2006年以降17ヶ国中12ヶ国であり、急速に増加した（JFA, 2013）。JFA国際部部長の平井徹氏によると、年々増加傾向にあり、各国から多くのリクエストが届いていると述べている（JFA, 2015）。これは、JFAが指導者養成を充実させ、日本の指導者レベルが他国と比較して格段とレベルが上がった結果だと考えられる（高橋ら，2014）。ブータンサッカーに関しては、2008年4月から行徳浩二氏がブータン代表チーム監督兼アカデミーヘッドコーチとして赴任した後、2016年まで4名の指導者が代表チーム兼アカデミーヘッドコーチとして派遣されている（JFA, online）。現在では、海外派遣サッカー指導者の日々の強化によって、2009年FIFA ランキング189位であったが、2017年1月現在では、176位にまで上昇した（最新FIFA ランキング, online）。2016年から育成年代の専任コーチとして赴任したU-14・U-17ブータン代表監督である李成俊氏によるとブータンには歴代の日本人指導者達による功績が多くある。その一つは、サッカーにおける規律と取り組む姿勢、そして、技術・戦術はもちろん、サッカーの持つ可能性を大いに広げ、ブータンサッカーに良い刺激を与えたことであると述べている（JFA, online）。

これまで、アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者による先行研究では、曾根（2008）が、シリアU-17代表チームのアシスタントコーチとして大会に臨むに当たって、大会前の約1ヶ月に渡る「試合全般に対する準備」と「個々の試合に対する準備」が戦略や戦術的活動において影響することを明らかにした研究がある。また、松山ら（2015a）の海外派遣指導者の貴重な経験

や指導実践での成果・課題を抽出するために、複線経路・等至性モデルを用いて、心理的変容のプロセスを検討することを目的とした研究、そして松山ら（2016a）の海外派遣サッカー指導者のコーチング環境の実態を把握するために、FIFAランキング上位・中位・下位別に実態の調査を行った研究がある。これらの研究結果から、アジア貢献事業の海外派遣サッカー指導者が派遣されているコーチング環境の実態が明らかになった。

また、ブータンサッカーによる先行研究では、海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題としてJFAアジア貢献事業ブータン王国での実践活動を中心に行った研究（松山ら、2014）や海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題を明らかにするために、U-19代表チームにおける強化トレーニング内容の観点から検証した研究などがある（松山ら、2015b）。また、ブータン女子代表と日本女子代表の各トレーニングに費やした時間を比較し、両国の強化環境の違いを明らかにした研究（2016b）など派遣期間の成果、また現状や課題に関しての内容の報告書や学術論文などがある。これらの研究結果から、ブータンサッカーレベルの現状を把握し、育成環境に関する施策を提案することが出来るようになった。

しかしながら、これまで示されてきた研究の内容は、赴任した海外派遣サッカー指導者が、現場の指導を通じて行った事例的調査や実態調査が主である。実際、赴任した指導者が、その国のサッカー指導によって、どのようなコーチング効果があったのかは、いまだ明らかにされていないのが実情である。そこで本研究では、海外派遣サッカー指導者のコーチング効果を検証するために、約10年間でJFAの指導方針に基づいて指導した4名の指導者が関わったブータンサッカー代表選手の競技力向上に関する考察を行うことを目的とする。

2. 研究方法

ブータンサッカー代表選手を調査対象に質問紙調査を実施した。得られた回答のうち、記入漏れおよび誤記入のあったものを除いた26名中22名を分析対象とした（有効回答率84.6%）。調査は、研究者本人がブータン王国ティンブー市に出向き、調査の目的などを簡潔に説明し、現地スタッフや選手に参加の同意を得た上で回答してもらい、その場で回収した。

2.1. 調査内容

松山ら（2015C）のJFAアジア貢献事業の育成年代選手の競技力に関する実態調査による指導者が選手を評価する尺度を基準に用いた。今回の調査において、その尺度を用いる際、サッカー経験のあるスポーツ科学有識者2名と大学院生2名によって、指導者が選手を評価する尺度から選手が指導者に指導を受けた内容に置き換え、その有効性を確認するための討議を行った。その結果、設問項目として、選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目（技術面、戦術面、体力面、心理面）の比率（%）と選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果

4項目各因子尺度から技術面として7項目、戦術面として3項目、体力面として5項目、心理的面として5項目を設定し、合計20項目から成る設問から設定した。設問の冒頭で、「以下に挙げるそれぞれの質問項目について、その指導者のコーチング効果にどの程度当てはまるかを考えて該当する数字を○で囲んでください。」と説明し、5件法（5：非常によく当てはまる～1：全く当てはまらない）にて回答を求めた。そして、各設問に対して5（5～1点）段階に評価し、全項目の得点を算出して総得点を算出し、総合評価を行なった。また、全項目ごとの合計点を競技力評価得点として算出した。

2.2. 調査期間

2016年8月9日～18日の計9日間実施した。

2.3. 調査対象

ブータンサッカー代表選手の中から、海外派遣サッカー指導者からシニア年代のみ2年未満の断続的に指導を受けていた選手をシニア群とした。尚、シニア年代のみで2年以上継続的に指導された選手はいなかった。また、海外派遣サッカー指導者から育成年代（U-14～23）を含めて2年以上の継続的に指導を受けていた選手を育成群とし、シニア群（ $n = 9$ ）と育成群（ $n = 13$ ）の2群に分け比較検討した。

2.4. 統計処理

全ての統計にはIBM SPSS Statistics 21を使用して t 検定分析を行った。なお、それらの統計上の有意水準は5.0%とした。

3. 結 果

3.1. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の分析

選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果の分析結果から、育成群とシニア群の比較において、主効果が認められた。 t 検定の結果、育成群がシニア群に比べて、技術面（ t 値 $=-2.40$, $p<0.05$ ）、戦術面（ t 値 $=-3.12$, $p<0.05$ ）、心理面（ t 値 $=-2.50$, $p<0.05$ ）の値が有意に高値を示した。

表1. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の分析

指 標	シニア群 (n = 9)	育成群 (n = 13)	t 値
技術面	55.00±22.91	73.85±14.02	-2.40*
戦術面	56.11±19.81	76.15±10.24	-3.12*
体力面	67.22±29.06	74.15±14.26	n.s.
心理面	58.89±29.66	85.00±12.25	-2.50*

*: $p < .05$, ns: not significant

3.2. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析

選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析結果から、育成群とシニア群の比較において、主効果が認められた。t検定の結果、技術面で育成群がシニア群に比べて、「ボールコントロール中イメージをもってプレー出来るようになった」(t値=-2.29, $p < 0.05$)、「様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった」(t値=-3.30, $p < 0.05$)の値が有意に高値を示した。また、戦術面の育成群がシニア群に比べて、「素早く適切なポジショニングを取ることが出来るようになった」(t値=-2.47, $p < 0.05$)の値が有意に高値を示した。

表2. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析

	指 標	シニア群 (n = 9)	育成群 (n = 13)	t 値
技術面	ボールコントロール中プレー中の視野が広がった	3.78±0.67	4.00±0.82	n.s.
	ボールコントロール中イメージをもってプレーが出来るようになった	3.33±0.87	4.15±0.80	-2.29*
	プレッシャーの状況でもボールを正確に止めることが出来るようになった	3.11±0.93	3.85±0.90	n.s.
	様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった	3.67±0.87	4.15±0.90	-3.30*
	左右での正確なロングボールを蹴ることが出来るようになった	2.89±0.78	4.08±0.86	n.s.
	簡単にはボールを奪われないキープ力がついた	3.44±0.73	3.85±0.90	n.s.
	ドリブルテクニック力がついた	3.56±0.89	3.85±0.90	n.s.
戦術面	戦術理解度が高く、指示したことを理解して実行出来るようになった	3.78±0.83	4.08±0.64	n.s.
	試合中の状況を考えてプレーが出来るようになった	3.56±1.01	4.08±0.76	n.s.
	素早く適切なポジショニングを取ることが出来るようになった	3.44±0.89	4.31±0.75	-2.47*
体力面	ジャンプ力を生かしたヘディングが強くなった	3.44±1.01	4.00±0.82	n.s.
	守備での1対1が強くなった	3.44±1.23	4.00±0.91	n.s.
	対人プレーで当たり負けなくなった	3.56±1.13	3.77±1.01	n.s.
	90分間走り続けるだけの体力がついた	3.44±0.88	4.00±1.00	n.s.
	相手より上回るスピードがついた	2.89±0.93	3.62±1.04	n.s.
心理面	日常生活でもサッカーに対する意識が高くなった	3.44±1.13	4.15±0.69	n.s.
	指導者の言うことを素直に聞くことが出来るようになった	3.67±0.87	4.08±0.64	n.s.
	練習や試合で向上心を持って意欲的に取り組むようになった	4.22±0.67	4.38±0.65	n.s.
	困難な場面に直面しても妥協しなくなった	3.78±0.67	4.23±0.83	n.s.
	いつでも自信をもってプレーするようになった	4.11±0.60	4.38±0.77	n.s.

*: $p < .05$, ns: not significant

4. 考 察

4.1. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の分析

本研究でのコーチング効果4項目（体力面、技術面、戦術面、精神面）はサッカーに必要な要素であり（加藤ら，1994）、この4つの要素を向上させていくためには、トレーニングの負荷と休息の最適なバランスを考えながら継続的に展開していくことが大切である（ゲロ・ビザンツ、1997）。また、この4項目におけるトレーニングの関係は、体力から技術、戦術、そして心理面のつながりによって成り立っており、体力トレーニングを継続的に展開していくことが不足した場合、大きな疲労によって、パスやシュートの正確さといった技術にも影響する。また、疲労によって、正確な運動や知的活動に集中できないため、戦術的な判断にも大きく影響する。更にテューダー・ボンパ（2013）では精神的な要因が身体的能力の改善に左右されるので、さらなる自信や精神力につながると報告している。このことから、完璧な体力は、結果的に最高の心理状態をもたらす。したがって、コーチング効果4項目に含まれる内容は、サッカーに必要な要素であり、それぞれに関連性があると考えられる。

前述した内容を鑑みて、本研究の結果から、育成群の技術面、戦術面、心理面の値がシニア群より有意に高値である要因に海外派遣サッカー指導者の指導をシニア年代しか受けていないシニア群と育成年代から指導を受けていた育成群との関係でトレーニング期間の影響が考えられる。表3による松山ら（2013）のU-19代表の研究結果から、U-19アジア選手権までトレーニング準備期間（2010年7月から2011年12月まで）の中で、284日（30, 217分）実施したと報告されている。同様にブータン代表の強化トレーニング内容の観点から調査した研究結果と比較すると、南アジアサッカー選手権までのトレーニング準備期間（2010年7月から2011年12月まで）の中で、160日間（16, 815分）であった。松山ら（2014）のブータン代表の研究結果からも国際大会までのトレーニング期間が短いのに、仕事や学校の関係で全員が継続してトレーニングできなかったことが報告されている。トレーニング内容に関して西（2008）は代表の強化は短期の強化のみでなく、日々の所属チームでのトレーニングにより長期的に強化されていくものだと述べている。このことから、ブータン王国全体の代表チームの強化策である選考会やトレーニングに対する理解が乏しい結果だと考えられる。

したがって、育成群がシニア群に比べて、コーチング効果4項目の技術面、戦術面、心理面の値にコーチング効果があったことから、海外派遣サッカー指導者の指導をシニア年代しか受けていないシニア群と育成年代から指導を受けていた育成群との関係でトレーニング期間の影響が考えられる。そのため、コーチング効果を考えた場合、現地の指導者も国内リーグが開始される1か月前にトレーニングを実施する短期的な期間ではなく、3年から5年の中期的・5年から10年以上の長期的で計画性のあるビジョンの中で、日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

表3. ブータン代表チームトレーニング頻度

松山ら (2013)

年月	ブータン代表			U-19代表		
	TR(日)	休(日)	時間(分)	TR(日)	休(日)	時間(分)
2010年7月	0	0	0	20	2	1,845
8月	0	0	0	25	6	2,470
9月	8	2	870	24	6	2,180
10月	25	5	2,185	12	5	1,030
11月	24	6	2,220	0	30	0
12月	3	28	275	0	31	0
2011年1月	16	15	2,630	0	31	0
2月	24	4	3,065	13	2	1,370
3月	25	6	2,175	27	4	2,865
4月	0	30	0	22	8	2,550
5月	0	31	0	13	17	2,210
6月	0	30	0	24	6	2,500
7月	0	31	0	24	7	2,610
8月	0	31	0	20	11	2,290
9月	0	30	0	27	3	2,560
10月	0	31	0	29	2	3,352
11月	28	3	2,740	4	0	385
12月	7	24	655	0	31	0
合計	160	307	16,815	284	202	30,217

4.2. 選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析

技術面で育成群がシニア群に比べて、「ボールコントロール中イメージをもってプレー出来るようになった」、「様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。

「ボールコントロール中イメージをもってプレーが出来るようになった」に関しては、JFAは、世界基準の選手を育成する上で、選手が試合中の状況を把握し、自分で判断して、プレーを決定し、イメージ通りにプレーできることを求めている (JFA, 2007)。ボールをコントロールする上で、多くのイメージを持ち、局面を打開するということの意味でも非常に大切だと考えられる。しかし、ブータン同様、サッカーの発展途上国のカンボジアフットボールアカデミー・U-15カンボジア代表監督である壺岐友輔氏 (以下：壺岐監督とする) によるとカンボジアの選手は、試合が始まれば、技術、戦術的に未熟の為、守備一辺倒で攻撃すらままならないことから (松山ら, 2016c)、ボールコントロール中イメージをもってプレーすることは厳しいと考えられる。徳永ら (1984) によると、一般的に競技レベルが高いほど、イメージ想起が高いという報告がされている。また、ビル・ベスウィック (2006) によると、イメージはトレーニングすればするほど、そ

これらの動きを正確に再現できるようになっていくと述べている。

したがって、技術面で育成群がシニア群に比べて、ボールコントロール中イメージをもってプレーする値にコーチング効果があったことから、シニア群は早期から試合で起こりうる状況を想起する基礎技術を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

次に「様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった」に関して、松山ら（2014）のシニア群に所属していたブータン代表の研究結果から、育成年代で「止めて蹴る」というすでに習得しておかなくてはならない技術レベルがかなり低かったと述べている。ブータン同様、サッカーの発展途上国のチャイニーズ・台北U-18代表監督である黒田和生氏（以下：黒田監督とする）も日本の選手と比較して育成年代での技術レベルが低く、パスの基本が徹底されていないと述べている（JFA, 2013a）。また、壱岐監督の後、カンボジアフットボールアカデミー・U-15カンボジア代表監督に赴任した井上和徳氏も、カンボジアの選手は、基本的、原則的なプレーが身に付けられていないと述べている（JFA, 2017）。前述した「様々な種類のキックを蹴ることができる」は、インステップ、インサイドキック以外のキックの種類だけでなく、両足で正確なキックができないのが、サッカー発展途上国の現状であると考えられる。松山ら（2016c）のカンボジアU-14アカデミー選手の1年間にわたるJFAフィジカル測定を行った結果から、技術トレーニングは、トレーニング全体の22.7%を占めており、左右の足を限定したトレーニングメニューも多く含まれていたことから、左右のキックの精度と飛距離が飛躍的に向上したと報告されている。

したがって、技術面で育成群がシニア群に比べて、様々な種類のキックを蹴ることができる値にコーチング効果があったことから、シニア群は早期から、様々な種類や両足で正確なキックができる基礎技術を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

戦術面の育成群がシニア群に比べて、「素早く適切なポジショニングを取ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。松山ら（2014）のブータン代表の研究結果から、国際大会で選手のアプローチやポジショニングのミスが目立った。また、相手選手にボールを奪われた後のカバーリングが遅れ、バランスを崩し失点するケースが多かったと述べている。ブータン同様、サッカーの発展途上国のラオス技術委員長に赴任した関口潔氏によると、ラオスの選手は、戦術的なことについて細かく言うと、それを実践しようとするが、言ったことしかやれないと述べている（JFA, 2013b）。また、チャイニーズ・台北U-18代表監督である黒田監督は、試合中に自ら素早く適切なポジショニングを取るなど、自分で判断して動く習慣が身に付いていないと述べている（JFA, 2013a）。

したがって、戦術面の育成群がシニア群に比べて、素早く適切なポジショニングを取ることができる値にコーチング効果があったことから、シニア群は早期から素早く適切なポジショニングを取ることができる基礎戦術を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

最後に選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の比率分析から心理面の値

が有意に高値を示したにも関わらず、各因子20項目の分析から値が有意に高値を示さなかった。しかし、これまで研究結果の中で松山ら（2014）のシニア群に所属していたブータン代表の国際大会の経験不足から過度に緊張する選手や冷静さを欠く判断ミスから、ファウルの回数が増加したと述べている。また、松山ら（2013）の育成群に所属していたU-19代表選手の冷静さを欠く判断ミスによる退場、試合開始直後の失点や失点の後連続して失点するなど、心理的な未熟さを露呈したと述べている。このことから、心理面でシニア群や育成群は設問した内容に有意な差が見られなかったものの決して高いレベルの達しているとは言い難い。したがって、海外派遣サッカー指導者のコーチング効果を考えた場合、ブータンサッカー代表選手に対してより多くの国際大会の経験と平常心を保つ心理面の強化を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

5. まとめ

本研究では、選手による海外派遣サッカー指導者のコーチング効果を検証するために、約10年間4名の指導者が関わったブータンサッカー代表選手の競技力向上に関する考察を行うことを目的とした。その結果、以下の内容が明らかになった。

1) 海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目の比率分析結果から、育成群がシニア群に比べて、技術面、戦術面、心理面の値が有意に高値を示した。したがって、コーチング効果を考えた場合、短期的な期間ではなく長期的・中期的なビジョンの中で、日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

2) 海外派遣サッカー指導者のコーチング効果4項目各因子20項目の分析結果

技術面で育成群がシニア群に比べて、「ボールコントロール中イメージをもってプレーが出来るようになった」、「様々な種類のキックを蹴ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。したがって、シニア群は早期から試合で起こりうる状況を想起する基礎技術や様々な種類や両足で正確なキックができる基礎技術を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

戦術面の育成群がシニア群に比べて、「素早く適切なポジショニングを取ることが出来るようになった」の値が有意に高値を示した。したがって、シニア群は早期から素早く適切なポジショニングを取ることが出来る基礎戦術を日々のトレーニングから行う必要があると考えられる。

以上のことから、海外派遣サッカー指導者は、短期的な期間ではなく長期的・中期的なビジョンの中で、継続的に育成年代から指導する必要があると考えられる。また派遣された指導者は、育成年代から国際経験などを多く積み上げる必要があると考えられる。

引用文献

- 1) ビル・ベスウィック：石井源信、加藤久 訳 (2006) サッカーのメンタルトレーニング。大修館書店、pp.140-158
- 2) ゲロ・ビザンツ、グンナー・ゲーリッシュ：田嶋幸三 訳 (1997) 指導者のためのサッカー教科書。株式会社ベースボールマガジン社、pp.27-47.
- 3) JFA. <http://www.jfa.jp/>. (2017年4月15日閲覧) .
- 4) JFA (2007) サッカー指導教本2007. サンメッセ, pp.10-86.
- 5) JFA (2013a) Technical news.Vol.58. サンメッセ, pp.42-43.
- 6) JFA (2013b) JFA news.Vol.351. サンメッセ, pp.32-33.
- 7) JFA (2015) アジア貢献事業の意義：アジアフットボール批評. 大日本印刷, pp.84-91.
- 8) JFA (2017) Technical news.Vol.78. サンメッセ, pp.44-45.
- 9) 加藤久, 福林徹, 大森一伸, 山本利春, 矢野雅和, 西嶋尚彦, 尾山末雄, 吉田優子 (1994) サッカーがうまくなるためのからだづくり. 大日本印刷株式会社, pp.130-142.
- 10) 黒澤尚, 勝田隆, 関岡康 (2004) 女子サッカープレイヤーのヘディング技能の向上に関する研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, Vol.15, pp.63-69.
- 11) 松山博明, 土屋裕陸, 堀野博幸, 須田芳正 (2013) ブータン王国サッカーのコーチングに関する調査研究-U-19代表チームにおける強化トレーニング内容の観点から-. 大阪体育学研究, Vol.51, No.3, p.28.
- 12) 松山博明, 土屋裕陸, 堀野博幸, 須田芳正 (2014) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-JFAアジア貢献事業ブータン王国サッカーの実践活動を中心に-. 大阪体育学研究, Vol.52, pp.15-22.
- 13) 松山博明, 土屋裕陸 (2015a) 海外派遣指導者の異文化体験とレジリエンス-アジア貢献事業による初めて赴任したサッカー指導者の語りから-. スポーツ産業学研究, Vol.25, No.2, pp.231-251.
- 14) 松山博明, 土屋裕陸 (2015b) 海外スポーツ指導者派遣事業の現状と課題-アジア貢献事業ブータン王国サッカーU-19アジア選手権の実践活動を中心に-. スポーツ産業学研究, Vol.25, No.1, pp.111-122.
- 15) Hiroaki Matsuyama, Takahiro Matsutake, Hiroyuki Horino, Hironobu Tsuchiya (2015c) Competitiveness of Young Football Players in the Japan Football Association Social Action Program. *Advances in Physical Education*, pp.94-102.
- 16) 松山博明, 関口潔, 土屋裕陸 (2016a) 海外派遣サッカー指導におけるコーチング環境の実態調査-FIFAランキングによる比較から-. スポーツ産業学研究, Vol.27, No.1, pp.40-56.
- 17) 松山博明, 松竹貴大, 中村泰介, 東亜弓, 土屋裕陸 (2016b) 女子サッカーにおける日本とブータンの強化トレーニング内容の観点から. 大阪成蹊大学紀要, Vol.1, No.2, pp.121-127.
- 18) 松山博明, 松竹貴大, 土屋裕陸 (2016c) アジアサッカー育成年代選手の競技力向上に関する研究-カンボジアフットボールアカデミー選手の実態調査から-. 大阪体育学研究, Vol.54, pp.3-13.
- 19) 西政治 (2008) 日本サッカーにおける育成期一貫指導の重要性と課題. -世界に通用する選手育成-. 京都学園大学経営学部論集, Vol.18, No.1, pp.173-196.
- 20) 最新FIFAランキング. <http://soccer-foot.com/fifaranking/> (2017年2月1日閲覧).
- 21) 清水正典 (2013) スポーツ社会システムの構造形成, 日本サッカーの発展過程と社会的背景. 吉備国際大学研究紀要, Vol.23, pp.53-63.
- 22) 曾根純也 (2008) シリアU-17代表チームの戦略・戦術的活動に関する研究. 大阪体育大学紀要, Vol.39, pp.37-38.
- 23) 高橋義雄, 佐々木康, 高橋義雄 (2014) 日本人エリートサッカー選手のアジアへの国際移籍とキャリア形成. 生涯学習・キャリア教育研究, Vol.10, pp.25-34.
- 24) 徳永幹雄, 橋本公雄 (1984) スポーツ選手に対する心理的競技能力のトレーニングに関する研究1-イメージトレーニングの予備的調査・実験. 九州大学健康科学, Vol.6, pp.165-179.
- 25) テューダー・ボンパ (2006) 競技力向上のトレーニング戦略. 大修館書店, pp.38-55.